



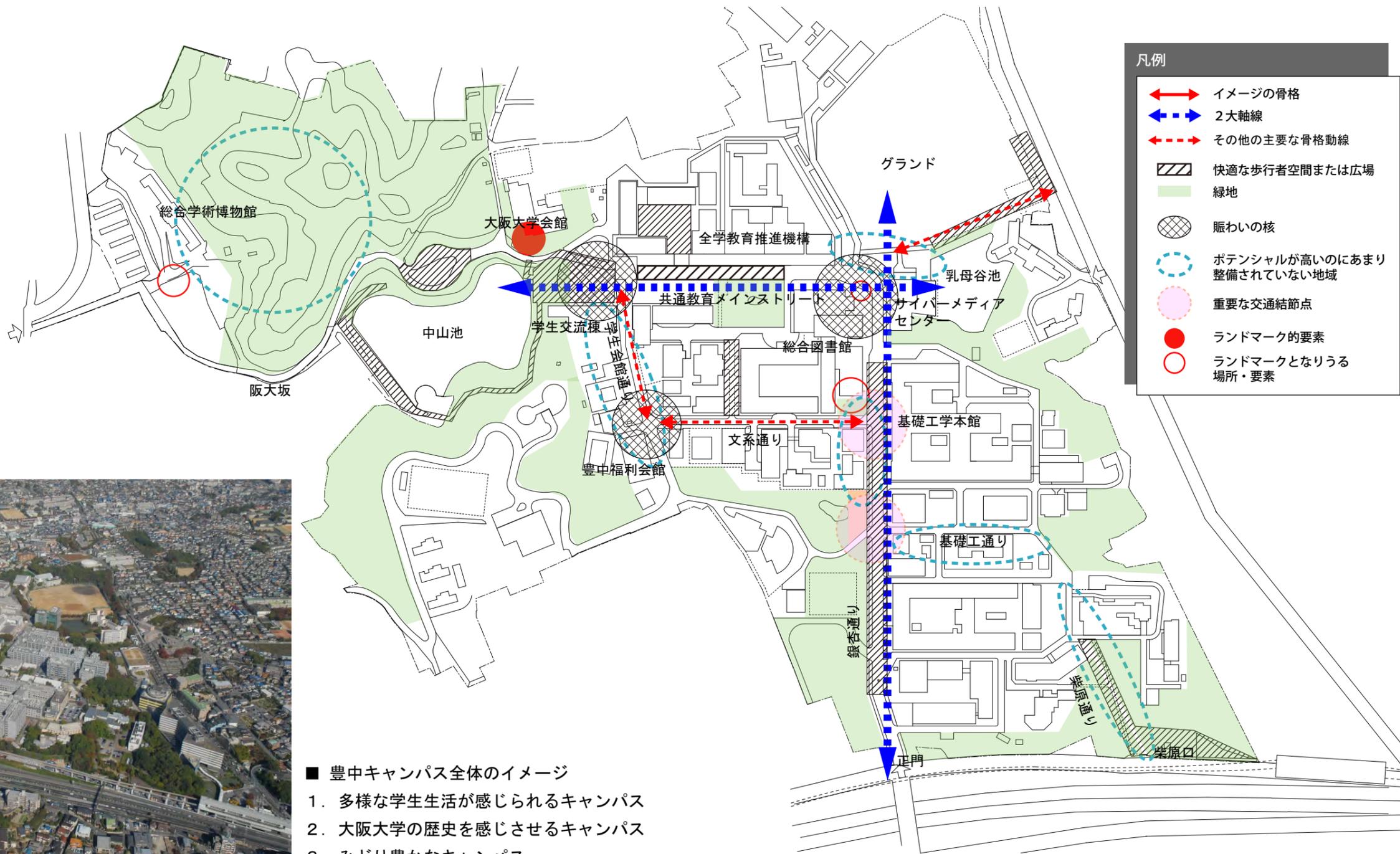
4. ゾーンおよび骨格・核の形成
4-1. 1) 骨格イメージ 豊中キャンパス

■イメージ骨格形成の方針

1. 2章で抽出した伸ばすべき資源のうち、特に「快適な歩行者空間」「緑地」に注目する。
2. これに別項で検討した「交通動線骨格」を加味する。
3. ランドマーク（大阪学生会館）、および賑わいの核との整合を検証する。

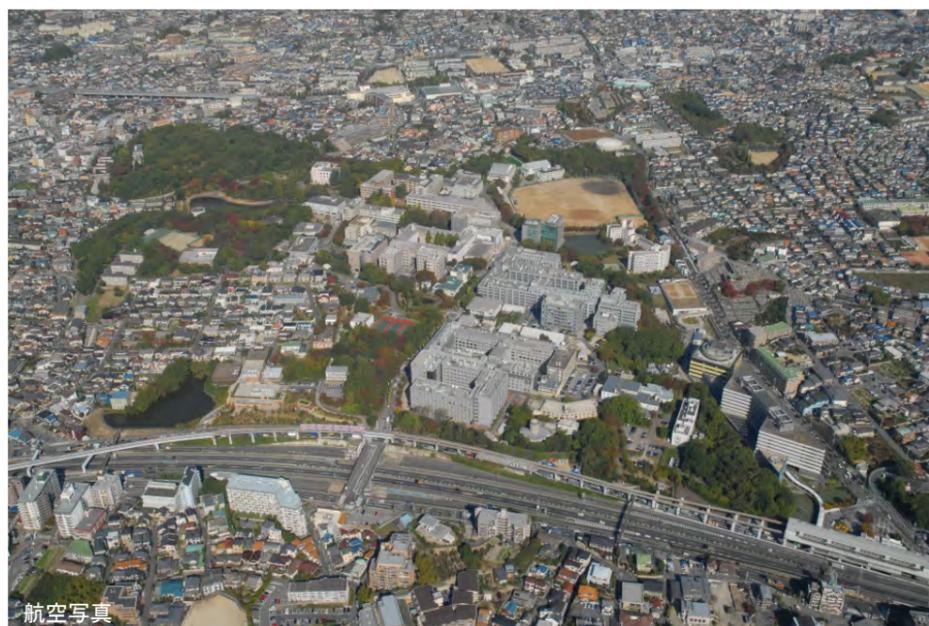
■イメージ骨格の形成

1. 阪大坂～全学教育推進機構前～银杏通り～基礎工通り～柴原口（図中赤矢印 ←→）は一筆書き状の主要な歩行者動線であり、強いイメージ骨格をなすことが解る。
2. 一方、正門～グランドまでの银杏通り、および全学教育推進機構の中山池～乳母谷池までの通りは従前からのキャンパスの2大軸線（図中青点線矢印 ←- - ->）であり上記の主要な歩行者動線と多くが重なる。
3. 現況の最も強いランドマークである大阪学生会館（図中赤●印）は、従来は賑わいの空間から遊離しており、キャンパスのシンボルとしての力が弱かったが、80周年記念整備事業の完成により、賑わい空間との相乗効果と強いシンボル性を獲得した。
4. シンボル要素としてはこの他、阪大坂の玄関口に位置する総合学術博物館、および、キャンパス内で最も賑わいのある総合図書館・サイバーメディアセンター前、及び基礎工前が、副次的なシンボル空間となる（図中○印）。
5. これらに継ぐ骨格要素として、豊中福利会館と大阪学生会館、および基礎工前を結ぶ街路（学生会館通り、文系通り）が揚げられる（図中赤点線矢印 ←- - ->）。



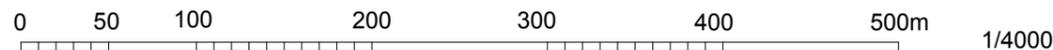
凡例

	イメージの骨格
	2大軸線
	その他の主要な骨格動線
	快適な歩行者空間または広場
	緑地
	賑わいの核
	ポテンシャルが高いのにあまり整備されていない地域
	重要な交通結節点
	ランドマーク的要素
	ランドマークとなりうる場所・要素



■豊中キャンパス全体のイメージ

1. 多様な学生生活が感じられるキャンパス
2. 大阪大学の歴史を感じさせるキャンパス
3. みどり豊かなキャンパス





1. 阪大坂下
- ・新しい阪大の顔となる整備を行う。
 - ・歩行者アプローチとして魅力的なものにする。
 - ・総合学術博物館と駐輪場と一体的な計画を行う。

2. 阪大坂
- ・歩行者アプローチとして魅力的なものにする。
 - ・中山池から大阪大学会館方向への眺望を生かす。
 - ・待兼山尾根とのつながりを生かす。

3. 石橋口
- ・主たる歩行者の入口としてふさわしい整備をする。
 - ・現況の豊かな緑を残しながら、より人が集い、くつろげる空間に変えてゆく。
 - ・維持管理に費用がかからない形態を目指す。

4. 大阪大学会館周辺
- ・学生交流棟とセットでシンボル空間となっている。
 - ・総合図書館方向、中山池方向への見通しの良い空間にする。

5. 全学教育推進機構前ゾーン（コミュニティゾーン）
- ・中山池～乳母谷池の軸線を重視し、見通しよい街路として整備する。
 - ・言語文化研究科北側～浪高庭園は、豊かな緑を活かしながら、くつろぎやすい空間の広がりを見通しの良さを持った広場として整備してゆく。

計画条件

1. 空間の骨格イメージを元に良いところを伸ばす計画とする。
2. 交通ネットワークの検討を反映する。
3. 現在の駐車台数をできるだけ減らさない
4. 柴原からの歩行者動線を整備する。
5. 保全緑地、保全空地を定義する。
6. 将来計画建物が、主要な歩行者動線に悪影響を与えないように配慮する。

*豊中キャンパスは、外部空間再編の余地が比較的限定されていることから、道路、歩道、広場、保全緑地等の配置計画を、より具体的かつ詳細に行う（凡例参照）。

その他の、または、今後の重要な検討項目

- A. 待兼谷広場整備
- ・博物館との一体的計画を行う必要がある。
 - ・待兼山ゾーンの核となる広場として、里山を保全しながら整備してゆく。
 - ・阪大坂にかわる新たな主歩行者動線として、旧医短門から石橋口へ至る経路の一体整備を検討する。
 - ・上記のネックは、尾根高さが石橋門より6m高いことである。待兼谷と石橋口間の尾根開削や、トンネル掘削も案としては考えられる。

- B. 各所のキャンパス出入口（図中▲）
- ・東口は、バリアフリー化の整備が完了し、かつ、国際交流会館からテニスコートを介し、グラウンドに緊急車両が進入できるように整備された。
 - ・北口、刀根山口、極限量子化学センター裏側の緊急用、その他出入口の役割を明確にする。

- C. バスロータリーと駐輪場の整備
- ・現在、総合図書館前で転回しているバスのロータリーを、歩行者と交錯が少なく位置に整備する必要がある。
 - ・全体に駐輪場が不足しており、集約化も含めて検討する必要がある。

デザインガイドライン

1. 将来計画建物が、歩行者動線や景観、広場に悪影響を与えない為のボリュームの考え方を示す。（日影、D/H）
2. 歩車道の考え方を街路特性に応じて示す。
3. 植栽の、街路との関係性や方針を示す。
4. 中庭（将来新規・改修）の方針を示す。
5. 建物入口と街路の関係性や方針を示す。

10. 福利ゾーン
- ・可能な限り歩行者街路としての快適性を高めるが、重要な車動線にもあたるので歩車分離を徹底する。

11. 全学教育機構裏側の道路整備
- ・交通動線の整理上、非常に重要である。
 - ・石垣、地山を切り崩す必要があり、やや大がかりな工事になる。

6. 総合図書館・サイバーメディアセンター周辺
- ・歩行者専用化し、大阪大学会館前と対をなすシンボリック空間として整備する。
 - ・乳母谷池親水空間と一体整備して池の景観を生かし、中山池からの軸線も生かした整備を行う。

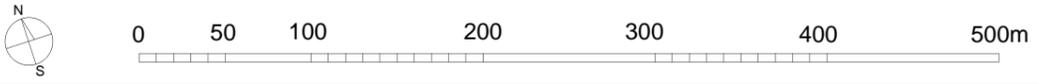
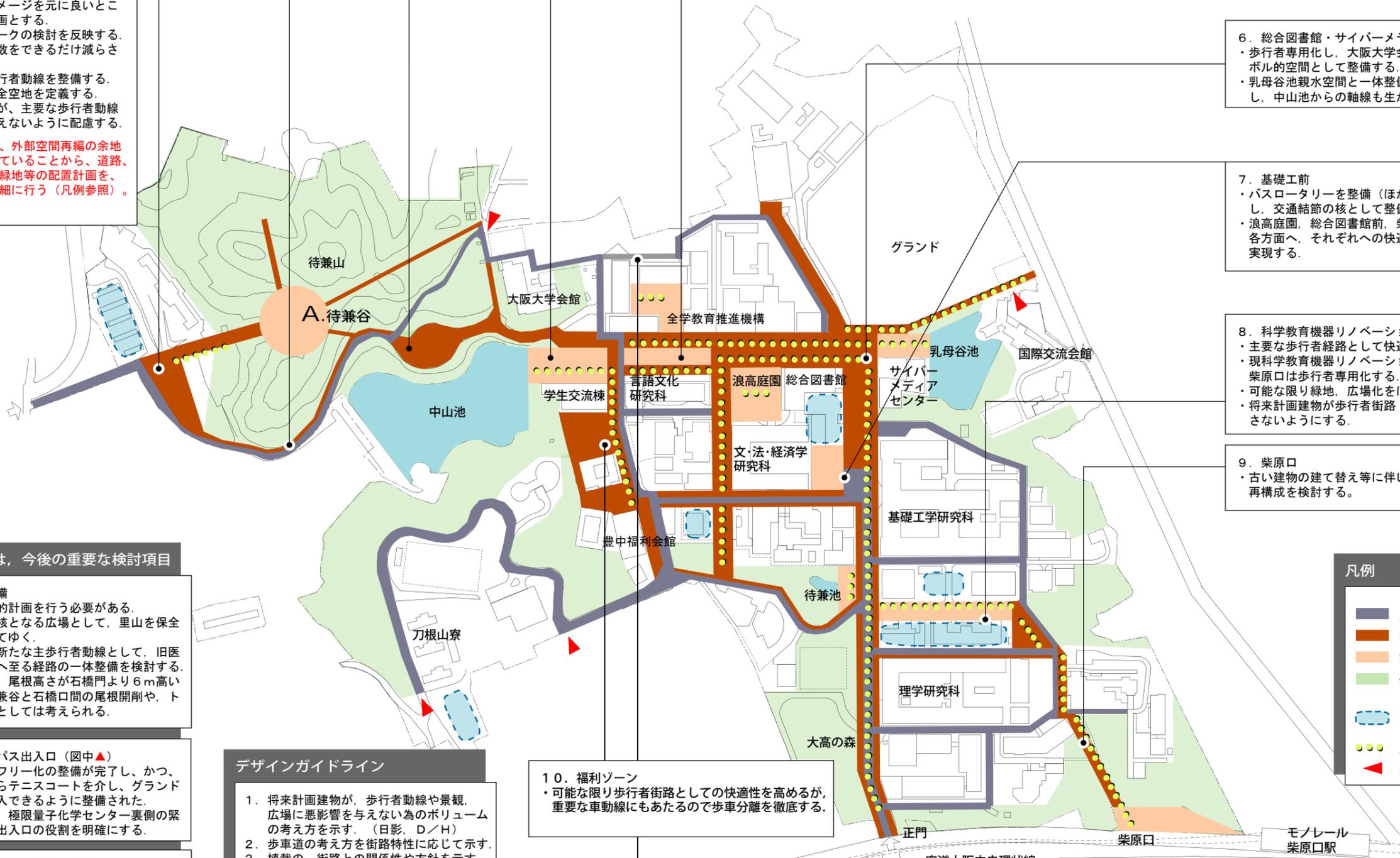
7. 基礎工前
- ・バスロータリーを整備（ほかの場所も検討する）し、交通結節の核として整備する。
 - ・浪高庭園、総合図書館前、柴原口、福利ゾーンの各方面へ、それぞれへの快適な歩行者アクセスを実現する。

8. 科学教育機器リノベーションセンターA棟周辺
- ・主要な歩行者経路として快適な街路を形成。
 - ・現科学教育機器リノベーションセンターA棟北側～柴原口は歩行者専用化する。
 - ・可能な限り緑地、広場化をはかる。
 - ・将来計画建物が歩行者街路・広場に悪影響を及ぼさないようにする。

9. 柴原口
- ・古い建物の建て替え等に伴い、周辺の空間全体の再構成を検討する。

凡例

- 主な道路（車道）
- 歩行者専用街路・歩道
- 計画広場・保全空地
- 保全緑地
- 建物計画を考える場所
- 主要な並木
- ▲ 緊急時車両入構口



1/4000



4-2. 1) 骨格イメージ 吹田キャンパス

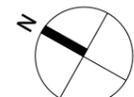
■イメージ骨格の形成

1. 中央通り、さくら環状通り、南通りは、立地条件、沿道建物の公共性の高さ、空間の広がりなどの観点から、シンボルストリートとして強いイメージ骨格をなす街路である。
2. さらに、千里門〜工学部中央オープンスペース〜理工学図書館〜中央通りと、コンベンションホール〜大阪大学本部棟〜中央通りのつながりは、それぞれ図となる建物や場所を結ぶ重要な歩行者軸であり、既存の広場や緑地をネットワークさせながら、イメージ骨格としていく必要がある。
3. シンボル要素としては、中央通り周辺のゾーンが、キャンパスの賑わいや景観の核となる最も重要な場所であり、リーディングプロジェクトとしての整備が望まれる。
4. この他、千里門周辺、工学部中央広場、モノレール駅周辺、犬飼池〜里山等を副次的なシンボルとして形成・育成する必要がある。



里山の散策路

工学部系の賑わいの核



1:6000

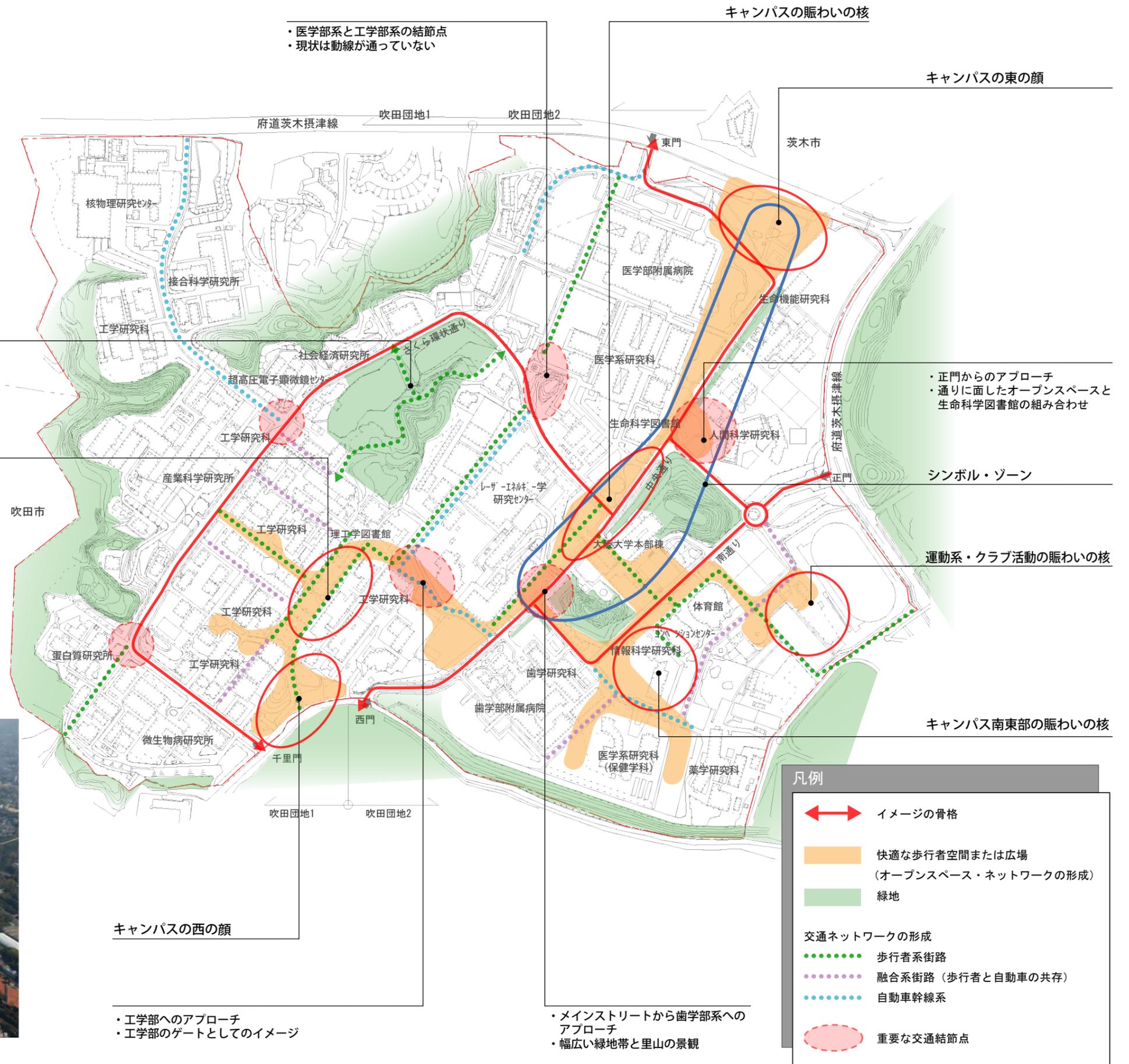
0 50 100 200 300 400 500m

■吹田キャンパスの全体イメージ

1. 広大で、各部局の個性が表出するキャンパス
2. 近・現代的なデザイン主体のキャンパス
3. 広域の緑のネットワークの一部をなすキャンパス



航空写真



- ・医学部系と工学部系の結節点
- ・現状は動線が通っていない

キャンパスの賑わいの核

キャンパスの東の顔

- ・正門からのアプローチ
- ・通りに面したオープンスペースと生命科学図書館の組み合わせ

シンボル・ゾーン

運動系・クラブ活動の賑わいの核

キャンパス南東部の賑わいの核

キャンパスの西の顔

- ・工学部へのアプローチ
- ・工学部のゲートとしてのイメージ

- ・メインストリートから歯学部系へのアプローチ
- ・幅広い緑地帯と里山の景観

凡例

- ←→ イメージの骨格
- 快適な歩行者空間または広場 (オープンスペース・ネットワークの形成)
- 緑地
- 交通ネットワークの形成
 - 歩行者系街路
 - 融合系街路 (歩行者と自動車の共存)
 - 自動車幹線系
- 重要な交通結節点

